

仮訳

(楨総合計画事務所レターヘッド)

2014年6月13日

IOC トーマス・バッハ会長

親愛なるバッハ会長

卒爾ながら、日本スポーツ振興機構(JSC)の2020年東京オリンピックのメインスタジアムに関する権限につき、とりいそぎお訊ね申し上げます。計画中の新競技場に関し、強い反対世論が高まるなかで、JSCはこれはIOCとの公約であって、最近の同計画縮小後はJSCは更なる変更を加える権限がないと表明しました。JSCの申立ては事実でしょうか。IOCとJSCとの間にそのような公約があるのでしょうか。

私は、2012年11月にザハ・ハディドによる2020年東京オリンピック新国立競技場デザインが発表されてより、同デザインとそのプログラムが持つ諸問題に関し、いち早く重大な懸念を表明した者です。予想される諸問題としては、同デザインと歴史的、かつ緑豊かな周辺環境との調和、巨大な建設費、機能的欠陥(サブ・トラックの欠如など)、安全への配慮などがあります。添付の2014年2月5日付けビジネス・タイムズ紙の記事に本件に関する私の専門家としての意見を開陳しております。

貴職は現国立競技場に隣接する東京都体育館をご覧になったと思います。1980年代初期に私が同体育館を設計した際、私は都内でも有数の厳しい規制上の制約のもとで、その難題をきちんと処理しました。

私は建設現場写真に投影されたザハの新国立競技場CGイメージを見て、都体育館やその周辺とはかけ離れた巨大さと高さに驚愕し、同案が抱える諸問題を直ちに予測しました。私が感知した問題点は、現在では素人にも明白となり、広範な専門家や市民がこぞって反対の声をあげております。高まる批判は日本の建築史上で前例をみないほどの広がりとしげさを示しております。

私どもは、IOCが求めているのは快適な環境下で17日間のオリンピック開催期間中利用できる8万人収容のスポーツ施設であり、その他の条件は開催都市の判断にゆだねられている、と理解しております。

計画中の新競技場は遅かれ早かれ大変な厄介ものになることは目に見えております。使いものにならない巨大競技場をもたらす重い負担に対し、市民の苦情や怒りが生じるのは必然であり、それに対し、JSCはおそらく「IOCとの公約」を言い逃れに使うと思われまふ。JSCのかかる歪曲はIOCの輝かしい歴史に汚点を残すことになりかねず、私どもはそのような事態を望んでおりませぬ。

従いまして、どうか本件に関するIOCの考えをはっきりとご説明ください。IOCが求める2020年東京オリンピックの主会場の要件は何なのでしょう。貴職のご説明があれば、私どもとJSCとの対話に新しい道が開けると思ひます。JSCや関係機関に対し、私どもは多くの代替案を提案できます。そのような建設的議論をもたらす成果は、2020年オリンピック・パラリンピック期間中称賛され、更にその後長きにわたり、人々に愛される競技場となることが十分予測できます。

現競技場案に関する諸問題や欠陥についてお知りになりたければ、私が喜んでご説明申し上げます。

貴職のご回答をお待ちしております。事態の緊急性に鑑み、早ければ早いほど有難く、ご回答の方法につきましてはお任せいたします。早急のご配慮に対し、厚くお礼を申し上げます。

敬具

(署名)
楨文彦
楨総合計画事務所 主宰

添付：2014年2月5日付 ビジネス・タイムズ紙記事